

ヒュー・メックス通信

vol.
03



「看護師が行うエンゼルケア」

復元納棺師 笹原留似子



第3回 血色について ～子ども編～



子どもの方の血色付け

人は死後、多くの場合時間の経過と共に血色が下方へ落ちることで血色を失います。



番外編 テクニック

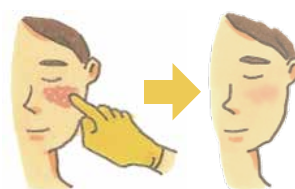
死後、顔の赤みが強く出現する方もいらっしゃいます。その場合は、下記の方法で自然な血色を表現することが可能です。

1



メモリーシオンのライトクリームファンデーション①とダーククリームファンデーション②を混ぜ合わせ、故人の肌の色を作ります。

2



1で混ぜ合わせた色を指先でテンテンとまばらに薄く付けていきます。色を付けることで、赤みをカバーできる他、肌の内側から自然に浮き出る血色を表現できます。

3



唇も同様に赤みが強い場合は、1で混ぜ合わせた色をテンテンと薄く付けることで、赤みが落ち着きます。その際、唇と肌の境目にも色を付け、境目をぼかすことで自然な唇に仕上がります。

ヒュー・メックス News!

【2020年度展示会出展予定情報/4月～5月】

4月25日(土) 旭川トーヨーホテル
第13回 旭川感染管理
ネットワーク研修会

5月29日(金)・5月30日(土) 海峡メッセ下関
第9回 日本感染管理
ネットワーク学会学術集会

5月30日(土)・5月31日(日) 島根県民会館
日本看護倫理学会

東日本大震災 写真・震災絵日記パネル展

～いのち新聞実行委員会～



悲しみの中の優しさに火が灯る日
あの日を忘れない...

2020 開催8回目 2/11(火)
北上市さくらホール
(大ホール・ホワイエ1F・2F)

10:00～16:00
＜入場料無料＞

- ◆東日本大震災行方不明者相談会
／警察本部検視官室
- ◆岩手県警察本部音楽隊 13:00～
- ◆被害者支援センター
- ◆ライブ 15:00～ ◆母ちゃん会
- ◆写真・パネル展示 ◆お砂踏み

「お孫さんお二人からのお手紙」

折り紙の裏に書かれたお手紙は、納棺が終わった後に故人のお孫さん二人からいただいたものです。

故人の死因は癌で、緩和ケア病棟に入院されていた。最後の時間を家族とゆっくりと過ごしていたそうです。家族が嬉しくて、安心して話してくれた内容の中に、「専門的な知識を持っている看護師さんが、配膳してあげてくれた」と。疾患や治療薬によって、食べられない食べ物があることが家族には難しかったので、薬が変更になるたびに丁寧な説明をしてもらっていたと話してくれました。病態生理を理解している看護師さんの方が気付くことが多かったこと、配膳のダブルチェックが自然な形で行われていたこと。また、看護師さんがトイレに連れて行ってくれることは、急変した際に対応を的確に素早く行うためだと説明を受け、いつも安心出来る環境だったことを、家族は回想の中で病棟生活の上でとても大切に思っていたこととして、いい表情で話してくれました。

ただ一つの不安

故人のご主人は地域でも多くの役員をされていて、たくさん納棺にも立ち合われ、死後変化の知識も豊富でしたが、ただ一つの不安は、奥様の死期が近づくにつれ、腫瘍の臭いと恐らく死臭だと思いが、強くなっているというお話しでした。ご自身の経験から言うと死後はもっと臭いが強くなるだろうという不安を抱えておられました。随分前からこの臭いに対しては、本人も気が付いているということで、沢山の人が会いに来てくれる前に臭いと表情を解決して欲しいという希望を生前予約として伺いました。

ご主人のお話しで、「大好きな旦那さんに、くさいと思われたくない。」と奥様が言っていたと伺いました。私の現場では普段からセーフティセットを使用していますが家族みんなで着せ替えを行うときに、マイナス80℃の保冷剤で冷却していても直腸からの臭いも非常に強く出やすいために、皆さまのお着せ替えの前に、現在の状態に対応しながら、今後の体液、浸出液、血液、臭いの予測を行い、死後処置は到着してすぐに行います。旦那様の前で奥様に恥をかかせないように、奥様の心情を汲み、セーフティセットを死後の早い段階で使用しようと決めたことを思い出します。

元々患者さんを引き継がせていただくことが多い医師だったため、ご主人の思いを主治医に報告しました。その後ご主人は、主治医から一つずつ臓器が役割を終えていくことの説明を受けて、体の中にある腫瘍からの臭いと、役割を終えた臓器から出る独特の死臭の意味を知る

ことで、看取る覚悟が出来たと話されていました。男性は哲学的な方が多く、しくみやメカニズムを知ることと悲嘆と共に過ごす方法を見出す方が多くおられます。お看取り後にお体が自宅へ帰ると、沢山の人がお参りのために待っていました。確認すると病院の死後処置ではセーフティセットを使用しているということと臭いを解決してもらっていたので、表情を戻すための処置を追加で行い、微笑みになったおばあちゃんにお孫さん二人が中心になり病院から帰ってきたメモリーションで保湿とメイクを行いました。看護師さんに教えてもらったと言っており、上手に仕上げていました。

お参りに来られた皆さんが二人の姿を温かく見守っていたとき、姉妹は、「おばあちゃん、聞いてね！せいのー」と言っており、ご本人の耳元で息を目一杯吸って、大きな声で歌を歌っていました。目一杯息を吸えたら、臭いが無くなった証拠だと、ご主人が目をまんまらして喜び、安心した様子で奥様の頭を撫でていました。彼女たちが歌っている歌は、おばあちゃんがいつも彼女たちに歌ってくれていた子守唄であることを、ご主人がティッシュで涙を拭きながら教えてくれました。「臭いがある時、苦しいのかな？痛いのかな？」と心配していたことを、この時お孫さん二人からご主人が打ち明けています。

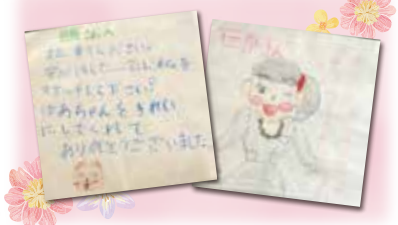
安心を一つでも多く提供したい

現在も緩和ケア病棟ではセーフティセットを使用しているのですが、お体が自宅に帰った後、お参りに来られた皆さんをお待たせすることなく、スムーズに引継ぎを完了し、対応できる現場が実現しています。死後処置の目的は、完成度が高いほどより深く安心した環境を提供出来ます。セーフティセットは、火葬まで故人を守ってくれます。死後、出来るだけ早いタイミングで使用してもらえと、遺された家族にとってよりよい環境がそれだけ早く安心として提供できます。

死後に故人が休まれるお布団は、全部白で統一されています。棺の中も、白のレースや布が使われているのが特徴です。そのため、屍血の「赤」又は「暗赤色」や体液・浸出液・漏液の特徴の「黄」、「黄赤色」などは体の外に出ると「白」の色の上に乗る形なので、家族は驚きと独特の臭いにより近寄ることが出来なくなり

ます。そのため、死後変化は予測をしながら先回りの処置が必要になるため、適切な処置を行います。グリーフケアは、安心を一つでも多く提供できることにより、スムーズな流れで回想に導くことが出来る

るかが勝負です。遺された



「お母さんを亡くした姉妹からのお手紙」

二枚のお手紙は、お母さんを亡くした姉妹からいただいたものです。故人は生前から私の講演を多く聞きに来てくれていた、学校の先生でした。長く病氣と闘いながら教育者として、生徒から慕われ、人気者の先生でした。先生は病院に通い治療しながら最後まで教壇に立っていたのだと、それも叶わなくなり、病院に入院して間もなく息を引き取ったと旦那様が教えてくれました。

明日に納棺を控えて、前日でしたと呼ばれて到着すると、自宅安置されていた先生の体からは、死臭が強く出ておりその臭いは部屋中に充満していました。このままでは、これから教える子たちが大勢会いに来るのに本人がかわいそうだということ、声が掛かりました。体のチェックを行うと、ルーツ痕は防水テープで保護されていたため出血は止めることができていました。保湿度も充分に行われていて、皮膚が安定していました。鼻腔と気道の処置は行われていなかったため、鼻腔には頭内からの血液が溜まり、気道には点滴により体の中に溜まった体液が上がって来ていました。臭いはその両方からで、少しでも動かすと漏れてくるため、脱脂綿で吸い上げ、少しした後にはセーフティセットを使用し、脱脂綿で仕上げの処置を行いました。保冷剤は適所に当たっており、体は冷えていました。冷却は大切ですが、それ以上に感染防御とグリーフケアの目的として初期段階での死後処置は大切です。

その後、表情を戻す処置と微笑みを取り戻したお母さんに、安心した子どもたちからのリクエストがあり、お母さんが学校へ行くときに気に入っていた服を着せたいとのことだったので、私もお手伝いに入り家族みんなで見せてもらいました。

いつも笑っていたお母さん

着せ替え中に回想がスタートしました。好きだった食べ物、こだわっていたこと、話した内容、怒られたこと、褒められたこと……。お手紙を読んだ下の子は、お母さんの手を自分の頬に当てたまま、動かなくなりました。さり気なく見ると、静かに泣いていました。「その涙は、お母さんの手のひらに刷り込んでおいてね。」と私が声を掛けると、「いいの？」と笑顔になり、刷り込んでいました。お母さんが作ってくれた料理の話になり、「それが一番おいしかった？」と聞くと、「おいしいかった！」と笑顔。私が「え？」と聞くと、故人のお母さんが「この子、あんまり料理が上手ではなかったの。」と、涙を拭きながら故人の傍へ来られました。みんな、大笑いをしました。料理の上手い下手が大切なのではなく、ここのお家は、こうやっていつも笑いの絶えない家庭であることを私は教えてもらったと思っています。

「お母さん、いつも笑っていたんだね。」私が聞くと、子どもたちは「そうー」と言いました。旦那さんが、「看護師さんに聞いたら、病院では大泣きしていたそうで、妻の悲しみを受け止めてくれた主治医や看護師さんたちのお陰で、子どもたちの前では最後まで笑顔で過ごせていたんです。本人らしいです。」そう話してくれました。

回想に入ることが出来れば、死を経験しても親子、夫婦、兄弟、友人など関係性が変わらないことに気が付いても不思議です。悲しみは決してゼロにはなりません。きつと、軽くならないと思いますが、その悲しみと共に生きる道を探し始めることは出来ます。悲しみの中に大切な記憶や温もりと、遺された人は生きていると思います。「死」に関わる私たちは、遺された人が顔を上げて立ち上がる瞬間に出逢える、専門職なのかもしれません。

お空の上に行って先生になると思う

最期に下の子がお母さんの手に、いつも使っていた教科書を持たせてくれました。お母さんの体が処置により安定したので、納棺は明日ではなく、4日後の火葬場に向かう直前に行いました。それまで故人となった先生は、家族と教えた子たちとゆっくりと笑いが絶えない時間を過ごしていました。

